50

茶と『神農本草経』について

岩間眞知子
東京都

『神農本草経』は，中国最古の本草書といい，成立は漢代1～2世紀とされる．医薬史の泰斗・岡西為人氏は，本来『神農本草経』所載薬と考えられるものの一つに「茗（茶）」を挙げた（「神農本草経所載の薬品について」『中国医書本草考』1974年）．それは宋代の類書『太平御覧』に，本草，本草拾遺，桐君録，神農食経，華佗食論，陶弘景新録などの古文献が引用されるためという．ただ「茗」は後漢の『説文解字』に見えず，東晋以降の文献に見える文字である．そこで『神農本草経』の成立を漢代とすれば，「茗」で茶を表現することはできなかったと思われる．

従来，茶は本草書において，唐の『新修本草』で始めて採録されたといわれてきた．『新修本草』巻13「茗苦檵」の項目末尾に「新附」とあり，宋の『証類本草（現存の大観・政和本草）』や明の『本草綱目』でも，茶は『新修本草』初出とされてきた．

一方，明の『本草品彙精要』では，茶を3～4世紀成立の『名医別録』初出とする．じつは『新修本草』より約160年前に陶弘景が編んだ『神農本草経集注（以下，本草集注と略称）』序録に，「茶茗」として茶がすでに記載されていた．『本草集注』において，『神農本草経』所載薬は朱書され，『名医別録』所載薬は墨書される．序録の「茶茗」は墨書のため『名医別録』初出と認識されたのだろう．

ところが『本草集注』巻7「苦菜」の注で，陶弘景は『神農本草経』の「苦菜」を茗（茶）であろうとし，「苦菜」と称するものには，茶以外の植物もあると述べた．

また『神農本草経』の卓越した研究者である森立之も，江戸末期の著書『本草経攷注』で「苦菜」を茶とも同定している．森は「苦菜」がノゲシなどを意味することも述べるが，「苦菜」の一名・選は，茶の別名・荈の古字であると位置付けた．さらに森の師・狩谷棭斎が「苦菜」は茶の本訓で，茗は味が苦いために茗とも茶とも言った文を引用し，「苦菜（ノゲシなど）」も「苦檟（チャ）」も同味同効で，『神農本草経』では同効異類のものも一名としてまとめたため，「苦菜」に複数のものが混在したと述べる．蘇敬は唐の『新修本草』で，茶は木類で菜類ではないので「苦菜」を茶とする陶弘景の意見を誤りとしたが，それは『神農本草経』の通例を理解していなかったためであるとした．

『新修本草』の蘇敬の意見に対し，私は『茶の医薬史』（思文閣出版2009年）で次のように述べた．茶は，唐初の『千金方』では「菜蔬」に，『芸文類聚』では「草部」に分類され，また「茗草」や「荈草」とも称された．唐の『茶経』は茶を表わす5文字「檟・蔎・荈・茗・茶」を挙げるが，そのうち4つは草冠である．そこで唐初まで，茶は「菜」や「草」と見なされたと考えられ，茶を「苦菜」と称することも十分にあり得るとした．

ところで「苦菜」をノゲシなどとする考えが，陶弘景にも森立之にもある．確かに苦味の強い植物を広く「苦菜」と称することは理解でき，後世の本草書ではノゲシやセンナリホウズキなどをも該当する．しかしそれらの植物を『神農本草経』に記された「苦菜」の薬効を目的として，今日使用することはないといい（浜田善利・小曾戸丈夫『意釈神農本草経』1993年），また宋代の『紹興本草』の「苦菜」の注でも，当時の「苦菜」には『神農本草経』に記された薬効が無いと伝える．歴代の本草書は「苦菜」に絵図を掲載しないが，それは「苦菜」をノゲシなどとすると薬名と薬効の一致が困難なため描けなかったのではないだろうか．

森立之の復元本『神農本草経』を見ると，「苦菜」の別名は「茶草」と「選」のみである．いずれも茶の別名と言え，薬効も歴代の本草書や今日認められる茶のそれと齟齬しない．以上から『神農本草経』の「苦菜」は茶を表すと考えられるが，さらに研究を進めたい．